

<国際宝飾展 2019>

今年の宝飾展への申し込みが遅く広いスペースしか空いていなかったのので、友人を誘いシェアする。左右並んだブースの床は地続きで同色、壁は同系色。BIZのブースはケースのタイプ、配置も一新し明るい。何やら来場者のタイプも違う気がする。白人女性の白髪に入った黒い線。それがとても自然に入り（黒くストライプ状の染め）ショートヘアアレンジもお洒落。仕事よりもそんな話で盛り上がり、BIZの大きなネックレスも気に入って頂いた。近くに出展のイタリア人から急にワインの差し入れ。名前も名乗らず消えていった。知り合いの男性デザイナー2人、“シマダサン、作品すっごく素敵になったよね”とグループ参加を誘われる。彼らの演出もなかなか良い。これらは色の効果なのかと不思議。今年、どんな変化を遂げられるか。



<猫は人を見る>

シマダの食事部屋はテーブルに本やらがやや混雑気味。正面の大きなガラス戸の先は庭。そこは猫のお散歩道にもなっている。〈世界猫歩き〉の岩合光昭がニューヨークからロンドンに着き、猫に“おはよう”とアメリカ英語で言ったら“フン”と馬鹿にしたカオをされ、イギリス英語で言い直したら振り向いてくれた、と。ちなみにパリの猫は〈気取っている〉とも。我が家の庭を散歩する猫は他人の庭を“失礼”と挨拶する気もないらしく悠々と歩く。余りに堂々としているので、庭に出て近づくと“なに？”と振り向く程度。部屋の中から美しい色を纏った鳥に気付き（なぜか色が美しい鳥は冬に見かける）、“ほら、あなた。その柵の上の綺麗な鳥、見て！”と言ったら、たまたまのかひょいと振り向いて眺めているかのよう。アメリカ英語に“フン”と言ったイギリス猫は気を取り直したのだろう。



<本愛>

とでも言おうか。とにかく本が好き。ウォーキングのつもりで出たのに足は本屋に向いてしまう。こんなにも面白い本を書く無名（私が無名でなかっただけ）の沢山の人々。ひたすら原稿を書き続ける。こうして出版された人々以外に出版に至らなか

った多くの書き手もいる。本はどこの知らない世界へも誘ってくれる。知らなかった世界を見せられ脳は沸点に達するかと喜ぶ。眼科医に言った。“本が読めなくなったら生きていく楽しみがなくなるので…” 本への愛である。

<生きているワイン>

随分以前の事。夜9時近くに“すぐ来て。今、ワインが面白い”の電話。地元勝沼の老舗ワイナリーより。なんでこんな時間に、とブツブツ言いつつ向かう。小さく深いプールの様な暗い底で、ポコン、ポコンと沸騰するような音。何、これ?と暗い底を覗くと強烈なワインの香りが。”今、醗酵真っ最中“とのこと。そのプールの淵に陣取りワイン飲み。深い底から突き上げる香りと相まってまさしく生きているワインは格別。”島田さん、ワイン作り、する?“まあ、それもヨイかも”とほろ酔い返答。今もワインはわが友。あのグツグツと泡たて醗酵する音と香りがワインの通奏低音のように今も胸の中に生きている。



甲州市ぶどうの丘ワインカーヴ

<人間はどこから来たか>

自分たちはシリウス(一番明るい星)から来た“というアフリカのある部族は言い、又別の部族は別の星を名乗る、という話がある。彼らの視力は現代人の我々より3倍遠くが見え視野も広く、これは現代医学で証明済みとのこと。アフリカでのシマダの体験で星がごつごつした大きな光る塊で、しかも日本の空よりずっと近くに見えた感動は忘れ難い。アフリカの人々は宇宙をごく身近に感じ、その中で自分達部族がどれだけ大きく輝く星から来たかを主張することで自分の部族の優位性を示すのだという。



立体的なカットの高品質銀線ルチル
周辺はエメラルド、アウイナイト、ダイヤ等で彫りも美しく上品
ネック部分はスピネル、サファイア



宇宙船を思わせるアクアマリン原石を
パライバトルマリン、ルビー、サファイアで楽しく飾る
ネック部分はタンザナイト、オパール